

一八九六年のロンドン博物館附属動物園の猿たち

——太宰治「猿ヶ島」にみる日本（人）表象——

王 盈 文

一、「ロンドン博物館附属動物園」という奇妙な場所

一九三五年九月の『文学界』（二巻八号）に掲載された太宰治「猿ヶ島」^①は、一八九六年の「ロンドン博物館附属動物園」が舞台になっている。従来の先行論は、それを単に「ロンドン博物館の動物園」や「ロンドン動物園」とみて、深く追求してこなかった。「ロンドン博物館」は、大英博物館（British Museum）のことであろう。しかし、大英博物館には附属動物園がない。また、ロンドン動物園（London Zoo）は、ロンドン動物学協会（Zoological Society of London）の施設であり、博物館の附属動物園ではない。とすれば、「ロンドン博物館附属動物園」という奇妙な場所設定は、果たして何に由来し、何を意味するのか。これが本論文の主要な問題意識となる。

「猿ヶ島」の同時代評価について、「この時代の、作家が属してゐる知識層の殆ど絶望に近い困迷」という武田麟太郎の指摘がある一方、「太宰治の「猿ヶ島」は、繊麗な文章だけが残つて、何かの諷刺らしいものは一向ピンと来ない」という鳥丸求

女の見解もある。「猿ヶ島」の先行論の多くは、その武田の同時代評を重視し、「日本の北方の海峡ちかくに生れた」というテキスト中の一匹の日本猿を太宰とみなし、作家論的に分析してきた。その結果、主な研究成果は太宰の精神構造や自己認識の解明にあつた。しかし、そうした作家論的な研究は、「猿ヶ島」の舞台としての「ロンドン博物館附属動物園」を説明できなかった。本論文は、この奇妙な場所設定の解明を中心に「猿ヶ島」を分析したい。

二、「動物園」とは何か

「ロンドン博物館附属動物園」をめぐる考察する前に、「動物園」ということばとその意味を確認したい。「動物園」とは何か。平凡社『大百科事典』（一九八五）は「動物園とは動物を収集飼育し一般に公開している施設であるが、日本では現在、博物館の一種とされる社会教育施設である」と定義している。また、『博物館学事典』（一九九六）によると、「動物園」は「自然系博物館の一種で、動物を収集し、それを生育状態のままに見

せることを中心とする博物館^⑤である。以上の二つの定義をみると、今日の日本では「動物園」が一種の「博物館」として認識されていることがわかる。

しかし、その「動物園」の定義は世界的に通用するものなのか。念のため、³⁰⁰の意味を確認する。『オクスフォード英語辞典』(OED) (一九八九)には、³⁰⁰が「リージェント公園内の動物園(つまりロンドン動物園)」。また、それに似ているほかの動物コレクションも敷衍していえる^⑥とある。また、『新オクスフォード英語辞典』(一九九八)をみると、³⁰⁰が「野生動物のコレクションを有する施設。典型的には、公園或はガーデンにあり、動物の研究・保護と公開展示がその目的となる^⑦」という。

このように³⁰⁰の説明は、日本の定義と違って、「動物園」を「博物館」としていないことが明白である。この認識の相違を検討するためには、日本における「動物園」概念の歴史的変遷を跡づけたい。日本で動物を集めて展示する施設は、江戸時代の「孔雀茶屋」や「花鳥茶屋」、或は近代のデパートの屋上小動物園などを例としてあげられる。しかし、それらは主に客寄せの見世物であり、動物を研究・保護する施設ではない。日本ではいわゆる「動物園」といえる最初の施設は、明治初期の一八八二年に開園した上野動物園であった。また、「動物園」という概念は、「幕末に海外に出て動物園なるものを見聞した人たちによってもたらされた^⑧」といわれており、近代日本の西洋体験に関係している。

では、最初に「動物園」をみた日本人は誰であろう。福沢諭

吉も参加した、一八六二年の竹内遣欧使節団がはじめての見学者とされている。彼らは、ロンドン動物園を含め五つの動物園を訪ねた^⑨。使節団の記録には各地の「動物園」が「禽獣園」や「鳥畜園」と記されている。また、福沢の日記『西遊記』をみると、「菜園」と「禽獣草木園」が使われている。そうしたことばの不統一は、「動物園」が使節団にとって目新しい施設であったことを物語っている。ただし、竹内遣欧使節団の記録には「動物園」という語がなかった。「動物園」の最初の用例は、福沢諭吉の『西洋事情』(一八六六)にみられる。以下は、その「動物園」に関する説明の部分である。

博物館

一 博物館は、世界中の物産、古物、珍物を集めて人に示し、見聞を博くする為めに設るものなり。〔…〕動物園、植物園なるものあり。動物園には生ながら禽獣魚虫を養へり。獅子、犀、象、虎、豹、熊、羆、狐、狸、猿、兎、駝鳥、鷲、鷹、鶴、雁、燕、雀、大蛇、蝦蟇、総て世界中の珍禽奇獸、皆此園内にあらざるものなし。

ここで省略したが、福沢の説明では、「動物園」を含めて「ミネラロジカル・ミュゼム」・「メヂカル・ミュゼム」といった五つの施設が人々の「見聞を博くする為め」の「博物館」とみなされている。そうした社会教育の施設として「動物園」を解釈することは、竹内遣欧使節団の副使である松平石見守康直の従者、市川渡の『尾蠅欧行漫録』にもみられる。市川は、ロ

ンドン動物園について「禽獸鱗介昆虫ノ種族細大無遺番フ園」であると説明し、さらに「西洋各国ニテハ此ノ如キ禽獸園草木園博物館等ノ場ヲ官府ニ造リ置テ〔…〕下民ヲシテ共ニ遊樂ヲ得セシメ又博物ノ識ヲマス等裨益アラシムル為」であると「動物園」の実用性を書き加えている。

二〇万から二五万部売れたベストセラーの『西洋事情』は、色々な方面に影響を及ぼしたといわれている。しかし、「動物園」という用語は、『西洋事情』刊行後、ことばとして必ずしも定着したわけではない。例として、岩倉使節団（一八一―一三）の記録をあげる。使節団副使木戸孝允の『木戸孝允日記』と、歴史家の久米邦武がまとめた使節団報告『欧米回覧実記』をみると、ロンドン動物園見学について、両者とも「動物園」ではなく「禽獸園」と記している。実際、「動物園」ということばの定着は、一八八二年の上野動物園の開園以降とされている。しかし、「動物園」は、*zoo*の訳語であり、日本語として必ずしも自然な用語と受け取られたわけではなかったのかもしれない。上野動物園開園後も、雑誌などには「動物館」や「動物学園」といった用例がしばしばみられる。

以上の考察から、以下の二点を確認しておきたい。一、「動物園」は、基本的に西洋のその移入概念として制度化されたものである。ただし、日本では福沢らの見解にしたがい、「動物園」が今日まで社会教育目的の「博物館」とみなされている。そのため、「動物園」概念をめぐって、西洋と日本との間には微妙な差異が存在している。二、近代に入って、訳語である「動物園」は段々定着していくが、「猿ヶ島」の時間設定の一

八九六年前後において、ことばとして必ずしも安定していないのである。

三、「ロンドン博物館附属動物園」という複合語

前述の「動物園」概念を踏まえつつ、本節では「ロンドン博物館附属動物園」という奇妙な名称の含む意味作用を考察する。まず、「猿ヶ島」の結末の部分を確認したい。

一八九六年、六月のなかば、ロンドン博物館附属動物園の事務所に、日本猿の遁走が報ぜられた。行方が知れぬのである。しかも、一匹でなかつた。二匹である。（七七頁）

「ロンドン博物館附属動物園」というと、まず思いつくのは「ロンドン動物園」であろう。しかし、ロンドン動物園は、ロンドン動物学協会が一八二八年にリージェント公園内に設立した動物園なので、博物館の附属動物園ではない。ロンドン動物学協会は、シンガポールの建設者として名高いイギリスの植民地行政官ラップルズ（*Sir Thomas Stamford Raffles* 一七八―一八二六）が「首都における壮大な動物学的コレクション」をつくるために発足させた組織である。また、ロンドン動物園の開園に当り、イギリス政府はリージェント公園内の北東の土地をロンドン動物学協会に提供した。イギリス政府が動物園設立に協力的であった理由は、一八二五年のロンドン動物学協会の設立趣意書にうかがえる。

当面の目的は、移入して飼育すればわが国に利益をもたらすと思われる、動物界の生きた素材を蒐集することである。このために、首都の近辺に本学会に所属する生きた動物のコレクションを設ける〔…〕わが国の領土は、広さにおいても多様さにおいても他国より豊かであるし、植民地、艦隊、世界各地とのさまざまなたえまない交易の面からみても、わが国は標本の蒐集や生きた動物の移入にはとりわけ便利なはずである。¹⁷⁾

つまり、ロンドン動物学協会の「動物園」は、「植民地」の動物を「学問」的に収集・研究する施設を意味し、大英帝国の海外進出に深く関わっている。したがって、イギリス政府が積極的にロンドン動物園の設立に係わったのは、そうしたエキゾチックな動物コレクションが大英帝国の国力を具体的に表象するものになるためであろう。

「猿ヶ島」で「ロンドン博物館附属動物園」という奇妙な場所設定がなされているため、ここで日本におけるロンドン動物園の紹介を確認しておきたい。まず、明治末期から大正期に出版された百科全書『日本百科大辞典』を引いてみる。「動物園」の項目には、世界各地の動物園の解説がある。ロンドン動物園については、「一八二八年開設、ロンドン動物学会経営」と記され、年間の見学者数や経営費用なども詳しく紹介されている。また、「猿ヶ島」が発表された一九三〇年代の認識に関して、小泉丹「動物園」(一九三四)¹⁸⁾を例としてあげる。東京帝

国大学出身の動物学者である小泉は、ロンドン動物学協会の初代会長ラッフルズの経歴や、ロンドン動物園の開設までの経緯を詳細に説明している。

以上の資料が示したように、日本でロンドン動物園は、「博物館附属動物園」ではなく、ロンドン動物学協会の施設として紹介・認識されていることが明らかである。したがって、太宰が「ロンドン動物園」を間違えて「ロンドン博物館附属動物園」と書いた可能性は低いと思われる。とすれば、太宰は故意に「ロンドン博物館附属動物園」を書いた可能性とその意味を考慮すべきであろう。「ロンドン」がイギリスの首都を指し示すことばとして理解できるが、問題は「博物館附属動物園」が何か、という点である。

この問題に関して、日本における「動物園」の成立と歴史に注目したい。東京都が編集した『上野動物園百年史』¹⁹⁾によると、日本の「動物園」の起源は一八七三年のウィーン万国博覧会に遡れる。ウィーン万博のために、日本政府は「澳國博覧会事務局」を設置し、生きた動物を含めて様々なものを集めていた。それら万博の出品物は、「国民の観覧にも供しよう」という社会教育の考えで、国内の色々な展覧にも転用されている。そして、第二回内国勸業博覧会の美術館を利用して一八八二年に開設した「国立中央博物館」(現東京国立博物館)の附属施設として、同博覧会の動物館を母体にした「大日本帝国農商務省博物館附属動物園」(現上野動物園)も同時に開園した。つまり、日本の「動物園」は、博覧会の「副産物」として誕生したのである。

国際社会における日本の政治的地位の向上や日本の資本主義的な競争力の強化、さらに知的に洗練された国民の育成のために、日本政府は内外の博覧会に力を注いだのであろう。したがって、博覧会に關係している「大日本帝国農商務省博物館物館附属動物園」は、明治日本の殖産興業政策の一環としてつくられた特殊な施設であり、「世界の動物園史における系列から見れば、例外的な位置づけだった」のである。「大日本帝国農商務省博物館物館附属動物園」から今日の「恩賜上野動物園」まで、上野動物園は所屬と名称を何回も変更してきた。ただし、明治期の内外の博覧会との関連を示す「博物館附属動物園」という名は、一九二〇年代前半まで上野動物園の正式名称に付けられていた。

日本の最初の「動物園」である上野動物園は、「博物館附属動物園」として明治日本の殖産興業政策に深く係わっているほか、動物収集方法に関するもう一つの特徴がある。外国の動物園やサーカスとの動物交換以外に、皇室への献上品も重要な供給源であった。『上野動物園百年史』によると、「宮中への献上品としての動物が、下賜または下附といった形で、動物園に收容されることが多かった。このようなことは、形をかえて今日まで伝えられ¹⁾てきたという。それら献上品のなかで、戦利品である異国の動物が少なくなかった。たとえば、日清・日露戦争のとき、台湾や満州・樺太の動物が上野動物園に入った。大正期以降も、各植民地から動物が上野動物園に送られている。そういう異国の動物の収集と展示は、前述のロンドン動物学協会の設立趣意書を再び想起すれば、新しい土地の征服や国力の

誇示を目的としたことはいうまでもない。「強盛」の日本を具体的に表象できる「動物園」は、まさしく殖産興業政策を推進する明治日本の意図したものであろう。

以上の分析を踏まえると、「ロンドン博物館附属動物園」という設定は、いくつかの意味が絡み合っていると思われる。まず、この設定は、実在しない場所であるが、イギリスと日本とを同時に指し示している。つまり、「ロンドン」はイギリスを、「博物館附属動物園」は殖産興業政策をとっていた明治日本を表象しているのである。次に、動物学協会所有のロンドン動物園も国の政策でつくられた上野動物園も、植民地の領有や国家の海外発展に關係しており、国威を示す場所になったことである。「猿ヶ島」の舞台として、「ロンドン博物館附属動物園」という複合語が創出されたことは、「動物園」と近代国家の発展や植民地主義との密接な關係をより明確にしていると思われる。

四、猿たちと一八九六年(申年)

ではなぜ、「猿ヶ島」は、近代国家の植民地主義を象徴する「動物園」を舞台にしたのか、また明治日本の改革を連想させる「博物館附属動物園」という表現を場所設定に組み込んだのかという問題が出てくる。これらの問題を扱うに当り、「猿ヶ島」に登場する「種類の猿——「日本猿」と「ほえざる」——と、一八九六年という時間設定に注目したい。

(1) ホエザル——中南米を指示する猿——

「猿ヶ島」の主人公の「日本猿」表象をより広い同時代的な文脈に位置づけるために、ここでは、まず見逃しがちな「ほえざる」に関する描写を確認する。

けたたましい叫び声ですぐ身ぢかで起つた。おどろいて振りむくと、ひとむれの尾の太い毛むくじやらかな猿が、丘のつつべんに陣どつて私たちへ吼えかけてゐるのである。私は立ちあがつた。「よせ、よせ。こつちへ手むかつてゐるぢやないよ。ほえざるといふ奴さ。毎朝あんなにして太陽に向つて吼えたてるのだ。」(七一頁)

「ほえざる」(吼猿・ホエザル)は、中央アメリカから南アメリカの中・北部に生息している「新世界」の猿の総称である。その名は大きな鳴き声に由来している。また、「特殊化した舌骨と共鳴袋を入れる巨大化した下顎部²²⁾」と長い尾がホエザルの特徴である。日本におけるホエザルの紹介は、明治末期すでにみられる。上野動物園の園長であつた黒川義太郎は、申年の一九〇八年元旦の『東京二六新聞』に発表した「猿の話」で、ホエザルを取り上げ、「声の大きいのが有名なのであるが、其大きな声を出すのは日出時と、日没時分で、其声が犬の吠ゆるのに似て居るから吼猿と云ふ名が付いた」と説明している。

先の「猿ヶ島」の引用を再びみると、太宰はホエザルの特徴をかなり正確に捉えていることがわかる。そうすると、「猿ヶ島」では、前述のイギリスと日本だけではなく、中南米も含め

て三つの地域が示されていると思われる。しかし、この三つの地域は、どう関連しているのか、また「ロンドン博物館附属動物園」と如何につながっているのか。

これらの問題に関して、「猿ヶ島」の時間設定、即ち一八九六年に着目したい。申年でもある一八九六年というと、日本は日清戦争に勝利して、最初の植民地である台湾を手に入れた翌年である。植民地台湾の統治やのちの日韓併合に向つて、日本は「植民地主義的な欲望をあらわにしつつある時期であつた²³⁾」という。そして、もう一つ注意したいのは、一八九六年は日本が不平等条約を全面改正した前年でもあることである。

明治日本は、岩倉使節団(一八七一—三)をはじめ、欧米各国との条約改正を努めてきた。しかし、イギリスが常に反対していたため、各国との交渉も難航していた。ところが、一八八九年頃になると、ロシアの極東進出政策を懸念しているイギリスは、日英友好関係を重視するようになって、妥協を示しはじめたのである。そして、一八九四年に日英新条約が成立し、日本は「日清戦争の勝利という国際的地位の向上にも助けられた²⁴⁾」、一八九七年末まで各国と条約改正の調印を行った。

「猿ヶ島」では、植民地に深く係わっている近代動物園から日本猿が逃げ出すという描写と、一八九六年という時間設定を合わせてみると、条約改正に成功した明治日本がイギリスなどと欧米各国に強いられた被植民的な地位から脱出したことを表象している。それに対して、動物園に残るホエザルは、当時なおイギリスの支配下にあるアメリカ大陸の英領ギアナ(現ガイアナ)やバハマを示しているのであろう。また、一八九六年とい

う時点を考慮すると、「ロンドン博物館附属動物園」は、植民地主義を掲げて巨大な勢力であったイギリスを「動物園」にたとえる一方で、条約改正も近代化も成功して、さらに植民地台湾を獲得したという明治日本のイメージもあると思われる。つまり、「ロンドン博物館附属動物園」は、日本とイギリスという一九世紀末の新旧植民者を同時に表象する設定である。

(2) 日本猿は耳が光る

——〈黄色い猿〉という日本人表象と「黄禍論」——

「猿ヶ島」で、ホエザルが正確に書かれている一方で、主人公の日本猿は「耳が光つてゐる」という理解しがたい描写がなされている。テキストには、こうある。

「ふるさとが同じなのさ。一目、見ると判る。おれたちの国のもは、みんな耳が光つてゐるのだよ。」(七〇頁)／
「あの石塀の上に細長い木の札が立てられてゐるだらう？
「……」人間たちはそれを読むのだよ。耳の光るのが日本の猿だ、と書かれてあるのさ。いや、もしかしたら、もつとひどい侮辱が書かれてあるのかも知れないよ。」(七六頁)

引用のように、「猿ヶ島」で、日本猿の耳が光ることは二回も強調されている。日本猿の特徴は、顔と臀部が赤いことや尾が短いことがよく知られている。「耳が光る」に関しては、調べたがみつからなかった。「もつとひどい侮辱が書かれてあるのかも知れないよ」という描写を考慮すると、「耳が光る」とい

う日本猿の特徴は、軽蔑の含みがあると推測できるが、具体的に何を指しているのか。

この問題について、もし日本猿の耳が光るとすれば、どんな色なのかをまず考えたい。小学館『日本国語大辞典』(二〇〇一)によると、「光る」は、「光を放つ」・「色彩などが輝く」をはじめ、一二個の意味がある。そのなかで、特に注目したいのは「金の威光がある」という解釈である。つまり、「光る」は、金の光、即ち黄色を意味している。念のため、名詞「光り」も確認すると、やはり「黄金の輝き」という説明がある。したがって、「光る」や「光り」は、黄金を連想させて、黄色を表しているといえる。そうすると、「耳の光るのが日本の猿だ」は、日本人が「黄色い猿」であると読める。しかし、この読みは何を意味するのか、またそれが「ロンドン博物館附属動物園」とどう関係しているか。

日本人の容貌は、使節団の派遣や万国博覧会の参加、軽業や劇団の海外巡回、そして幕末明治期に来日した外国人によるスケッチや写真を通して、海外へ伝わっていったと考えられる。かつての欧米における日本人のイメージは、「眼鏡・細いつり上がり眼・出っ歯・小柄」・芸者・侍、そして「猿」などが代表的であった。〈猿〉の擬人化を以って日本(人)を表現する場合、まず考えられるのは、日本が「未開な地」、日本人が「野蛮な人」という「近代化の未完成」を強調するためである。

図一は、明治期に来日したフランス人画家ビゴーが一八八七年に発表したスケッチである。日本人の外観と中身の落差を示す構図から、ビゴーは日本の近代化を「猿真似」として皮肉に

描いていることがわかる。そうした「猿」で「未開・野蛮な日本」を表現するのは、欧米各国が日本における利権や不平等条約を合理化するためでもある。実際、図一には「条約改正時期尚早論に同調したビゴアの意図的感情が込められている」という。

では、近代化の成功を世界に証明した日清・日露戦争の後、日本は海外でどのようにイメージ化されていたのか。特に白人国家ロシアを破った日本が国際社会の注目の的となり、「世界の新聞雑誌で日本を画題として描く諷刺画が最も多くなつた」時期のものに注目しよう。図二は一九〇五年八月の『新公論』に掲載されているものである。ヘロシア態を倒した「日本猿」が世界地図を用いて次の標的を探すという構図から、欧米各国の警戒と懸念を読み取れる。ただし、「日本猿」という造形は、日本が欧米の「真似」をしたからこそ、ロシアに勝利できたという軽蔑の含みがあると推測できる。結局、戦勝の日本は「猿真似」のイメージを変えるところか、さらに西洋の警戒心を惹起してしまつたのである。

新たに警戒の意が加わつたという「猿」表象の変化のほか、日露戦争のもたらした様々な影響のなかで、「猿ヶ島」に関連している、開戦のときから日本人が強く貼られた「黄色」というレッテルが注目に値する。この問題に関して、まず一九〇四年七月の『太陽』の記事「三条の弁惑」をみてみよう。著者の島田三郎は、足尾鉾毒事件の支援や廃娼運動の推進で知られて、衆議院議員・毎日新聞社長であつた。



図一 「日本人表象①」



巴に露熊
を足下に
したる日
本猿は今
や地圖を
擴げて此
次をマニ
ラにせん
が諸洲に
せんかと
思案最中

(マニラニマニラニ)

図二 「日本人表象②」

日露開戦以来、日本に対する誣言相続で起る、其細事は一々挙ぐるに暇なし、今其顕著の者を取りて之を評せんに、大約三あり、曰く、西洋対東洋の戦、曰く白人対黄人の戦、曰く基督教国対異教国の戦是なり、是皆此文字以外、一種異様の精神を包みて、日本を不利の位置に立たしめんとする露人の造言誣説に非ざるなし〔…〕

即ち、日露戦争は、東西の文化・人種と宗教の対決とみなされている。問題は、なぜ「白人対黄人の戦」といった見方が「日本を不利の位置」にしたのか。戦争初期の一九〇四年六月二二日付の「読売新聞」には「露国の征日軍歌」という記事があり、当時のロシアで流行していた軍歌「スラフナヤ、ロシア（露西亞万歳）」が紹介されている。歌詞の大意はこうである。ロシアは「仏蘭西土耳其瑞典」を破ってきた。「三国に劣れる黄色の日本国民 ああ遠からずして敗走せん」、「黄色の日本人種地に伏し 和を乞ふこと嗚呼遠からじ」と歌われている。つまり、ロシアやヨーロッパの白人の優位を表すために、日本人が「黄人」と分類されていることは日本を見下すのに利用されている。

そうした国力と文化の弱さや停滞を連想させる〈黄色〉は、日露戦争後も日本を含めてアジアの人々の差別に長く利用されている。例として、大正期に入った一九一四年八月の『中央公論』の記事「亜細亜民族の覚悟を促がす」に注目する。そこには「従来の歐洲人の亜細亜に対する根本思想は鼠色の人種、黄色の人種は進歩を停止せるものと云ふにありて、彼等是一種不

可思議の精神的麻痺症に罹り、今後幾百年尚ほ今日の状態を維持すべしと思惟されたり」という指摘があり、〈黄色〉の意味する人種差別の根強さをうかがえる。

「猿ヶ島」で、同じ日本猿の彼に白人が自分たちの見世物であると教わった主人公は、動物園に来た二人の白人少年が「いつ来て見ても変らない」と不機嫌そうに話したことから、自分こそ見世物にされているのに気づいた場面がある。耳の光るのが日本の猿だ」という主人公の特徴と、その白人少年らの会話を結びつけて考えると、白人からみれば、〈黄色い猿〉はいつまでも変わらないと読める。換言すれば、日本（人）が進歩せず、停滞しているという西洋の軽蔑のまなざしがここで描き出されているのである。

日露戦争の戦況と結果にしたがって、〈黄色〉は、アジアの劣等や停滞を意味するほか、黄色人種が世界に災難をもたらすという「黄禍論」の形で、欧米の警戒心を示すものにもなってきた。東洋史学者の桑原隲蔵は、一九一三年に「黄禍論」をこう説明している。

黄禍論が一般の注意を惹くに至つたのは、ドイツ皇帝が「黄禍」と題した、一幅の寓意画を作つた以来のことである。日清戦役の終期、三国干渉の起らんとする前後、ドイツ皇帝は一の寓意画を工夫された。〔…〕いはゆる黄禍といふ文字も、この時以来盛に使用されることとなつたが、実際の所、当時日本は三国干渉の為に大挫折を受けて居る。〔…〕所が明治三十七八の日露戦役後から、黄禍論は

始めて世界的問題となり、欧米人も真面目にこの問題に耳を傾くこととなつた。

図三は、一八九五年の夏頃、ウィルヘルム二世が画家クナツクスに描かせた「黄禍の図」である。大天使ミカエルは、遠くにある仏陀と龍を指して、ドイツ・ロシアとフランスなど、ヨーロッパ諸国を代表する女神たちに警戒を呼びかけるといふ構図である。仏陀と龍は、中国をはじめ、アジアを表しているのはいうまでもない。「黄禍の図」は、一九〇四年八月の『新公論』の表紙になったり、一九〇八年二月の『太陽』臨時増刊号「黄白人の衝突」の口絵に掲載されたりして、日露戦争頃から日本で広く紹介されている。ほぼ同時期に「黄禍の図」の提起する「黄禍論」も、日露戦争の経過に伴って、欧米で問題視されてきた。その理由は、『読売新聞』が日露戦争中の一九〇四年に『支那タイムス』から転載した記事「黄禍説は杞憂なり」にうかがえる。

〔黄禍論に関して〕余輩の説に依れば二箇の理由あり其一は過半・歐洲人に固有なる自負心にして彼等は矮小の日本人をして自己と同等の位置に置くを好まず〔…〕黄禍説第二の原因は〔…〕若し日本にして露国に対し全勝を博するの日には歐洲の利益は致命の打撃を受くべし何となれば日本は戦勝後絶東の世界に全権を振ふと同時に貿易界を独占すべければなりと〔…〕（八月十六日支那タイムス所載）



図三 「黄禍の図」

即ち、日露戦争の戦況をみて、欧米諸国は、白人優越感というメンタルな部分と、アジアにおける利権の喪失につながりかねない現実問題から、優勢に伝えられた日本を懸念して、それが「黄禍論」の流行を促がしたと考えられる。日露戦争後、日本という非白人の新興国家の出現と、戦勝の日本が中国と連携して欧米をアジアから追いつ出す可能性は、「黄禍論」をいっそう真実味のあるものにしていった。アジアを世界のトラブルメーカーとする「黄禍論」は、前述の「猿」表象と同じ、近代化と戦争に成功・勝利した日本を文明国ではなく、警戒すべき相手としている欧米諸国の考えを表している。

しかし、アジアの勃興を意味する「黄禍論」の流行に対して、明治日本は歓迎というよりむしろ懸念を示している。日露戦争をきっかけに広がる「黄禍論」は、欧米各国の警戒心を呼び起こし、日本の国際地位の向上に妨げていると考えられる。そのため、明治日本は、「黄禍論」を大いに問題視し、それを排除・阻止する行動に出たのである。そうした日本政府の姿勢は、知識人も同時代の世論も同調している。

たとえば、一九〇四年、森鷗外は著書『黄禍論梗概』の凡例で、「日露の戦は今正に酣なり。而して我軍愈勝たば、黄禍論の勢愈加はるべし。黄禍論の講究は実に目下の急務なり」と説明している。また、同年五月一五日の『読売新聞』の記事「日本主義の復活」には、「我社会が此黄禍論の消滅に努め世界をして其説の無意義無根なるを合点せしむるに努むる」、「前途日本の成功は、なほ或は口を黄禍説に借るの詭言を惹くこと無しと保すべからざればなり」という見解がある。

「猿ヶ島」で、日本猿の「耳が光る」という設定から読み取れる〈黄色い猿〉という日本(人)表象は、以上の考察のように、軽蔑と警戒の二重の意味がある。日本猿は「ロンドン博物館附属動物園」から逃げ出したが、それは人間ではなく猿であることに変わりはない。動物園の設立を含めて、西洋の学問や制度を導入して、近代化と条約改正に成功した日本が相変わらず西洋に見下されており、さらに彼らの警戒心を惹起してしまつたことは、「猿ヶ島」の主人公・場所と時間の設定に示されていると思われる。

五、〈猿ヶ島〉と一九三五年

続いては、一九三〇年代に戻り「猿ヶ島」を分析したい。この作業は、テキストの発表時間によるものだけでなく、その題名にも関係している。

(1) 動物園の〈猿ヶ島〉

——一九三〇年代の同時代表象——

「猿ヶ島」は、その題名の通り、動物園のなかの〈猿ヶ島〉で起こつた話である。しかし、この設定は、テキスト内の時間、つまり一八九六年に合わせてみると矛盾点がある。一八九七年のロンドン動物園の設計図を調べると、「THE MONKEY HOUSE」があるが、〈猿ヶ島〉に当る設備がみつからなかった。先も引用した小泉丹「動物園」によると、ロンドン動物園の「自然背景的の施設としては、大きいマッピン段丘と猿丘があるのみである。猿丘は五年前(一九二八年頃)に出来た当園自慢のものの一つ」という。『動物園』には、一九三〇年代のロンドン動物園の地図がある。それを見ると、「猿猴館」と訳された例の「THE MONKEY HOUSE」のほか、「猿丘」、即ち〈猿ヶ島〉の存在が確認できた。

太宰は「猿ヶ島」を書くに当って、上野動物園の〈猿ヶ島〉を見学したそうである。『上野動物園百年史』を調べると、一九三一から三二年につくられた〈猿ヶ島〉は、上野動物園の「昭和初期の大改造で、最も画期的なもの一つ」である。そのため、〈猿ヶ島〉は、一九三二年をはじめ、各新聞紙で多く

取り上げられていたのである⁽¹²⁾。そのなかで、一九三三年八月二日の『読売新聞』の記事「猿山とは何か？上野動物園に出来る珍しいチリのお話」は、〈猿ヶ島〉の平面図まで描いて説明している。それをみると、一九三〇年代の日本において、〈猿ヶ島〉が如何に新しいものであるかを理解できる。

ロンドン動物園も上野動物園も、〈猿ヶ島〉が一九三〇年前後にできた新しい設備である。したがって、〈猿ヶ島〉は一九三〇年代の同時代表象として捉えられる。また、太宰の「猿ヶ島」は、新しいものを取り入れて、人々の注目の的であったものを題材にしたテキストであると指摘できる。「猿ヶ島」の時間設定が一九九六年であるが、その題名に示されている時代性を考慮すると、一九三〇年代においてテキストをみる必要があると思われる。

(2) 一九三五年と「新黄禍論」⁽¹³⁾

ここでは、「猿ヶ島」の場所設定と登場人物に示されている、日本・イギリスと中南米という三つの地域をキーワードにし、一九三〇年代の新聞を調べて手がかりを求める。その結果、中南米との綿布や羊毛貿易をめぐって、日本とイギリスが衝突しつつあったことがわかる。たとえば、一九三三年九月七日の『読売新聞』夕刊は「日、英、米資本が南米で闘争 わが進出 英国側に恐慌」と報じている。一九三四年四月二十九日に「到るところで日本品は大歓迎 特に綿製品は完全に英米を圧倒 南米市場視察団帰る」の記事が『大阪毎日新聞』にみられる。

昭和初期の日本経済、特に輸出関係について、一九三〇年四

月のインドの関税引き上げ、一九三二年の満州事変後の中国における日貨ポイコットなどの影響で、新市場の開発に迫られていた。アルゼンチン・東アフリカ・「南洋」やエジプトなどが日本政府の期待していた新市場である。中南米の経済進出に関して、「一九三三年頃から日本人はラテンアメリカを極めて有望な市場と考え始め〔…〕三井物産や同じく三井系の鐘紡などは市場調査に社員を派遣していた。ラテンアメリカ市場拡張のために国内ではすでに政府と業界は緊密に連絡を取りつつ「官民一体」となって努力する雰囲気ができあがっていた」という。

しかし、日本の中南米といった新市場の開発は、イギリスを含め欧米各国の警戒心を惹起してしまった。当時の西洋の反応は、「猿ヶ島」に関連していうと、かつて日露戦争のとき流行していた「黄禍論」の再利用が特に注目すべきである。例として、一九三二年一〇月八日に『大阪時事新聞』は「新黄禍論 日本品粗悪を英国側が宣伝 邦品の印度市場占領に懼れて」を掲載している。翌年二月一七日の『大阪毎日新聞』は「日本商品の圧迫に今や欧米各国狂奔す 欧州滅亡の時期到来せん “黄禍”を叫ぶドイツ」と報じている。

それらの記事を詳しく分析すると、「黄禍論は往時ほど時代錯誤の感を与へない今日政治軍事的黄禍はなきも日本の経済競争は世界市場へ進出して来た」という経済の観点から「黄禍」を使う例もあるし、日本帝国のアジア大陸進出を踏まえて「日本は黄色人種的首領だと自称し自らの野心を隠しアジア人を煽動しつゝ、ヨーロッパ文明に反旗を翻へしてゐる」という政治問題まで拡大して「黄禍」を取り上げる論説もある。この政治と経

済の問題が絡み合っているという一九三〇年代の「新黄禍論」の特徴は、外交史家の米田実も一九三四年七月の『中央公論』で指摘している。米田によると、「尤もそれ『新黄禍論』は経済的性質の声のみではなく、巧みな政治家連は日本の侵略主義若くは黄禍論の再燃と言ふやうな政治的懸念でも援助してゐるのである¹⁷⁾」という。

先述の新聞と雑誌の記事を再びみると、一九三〇年代の「新黄禍」言説は、確かに一九世紀末葉から二〇世紀初頭に流行していた「黄禍論」をベースにしているが、漠然のアジア恐怖ではなく、日本を名指しているという明白な違いがみられる。即ち、「新黄禍論」のもう一つの特徴は、日本という国家の脅威に特定されることである。『暗黒日記』で知られているジャーナリストの清沢泐は、著書『世界再分割時代』（一九三五）で、日清・日露戦争頃の「旧黄禍論」と一九三〇年代の「新黄禍論」を以下のように解釈している。

旧黄禍論においては日本の勢力は未だ微々たるものであつたから、その内容は漠然として日本と支那が提携して白人種に当るであらうといふ程度であつた。しかし新黄禍論は、折しも世界に氾濫する日本商品と、国際連盟と断つて嶋を負ふ虎の如くに一人立つ日本の国際的位置に顧みてそれは黄禍論であるよりも、むしろ Japanese Peril¹⁸⁾である。

新旧「黄禍論」を比較する清沢の論説のように、「新黄禍論」は、欧米の「旧黄禍論」に関する記憶の喚起や再利用だけでは

なく、昭和初期の日本に明治期を思い出させる働きもある。「猿ヶ島」を一九三〇年代においてみると、日本猿の「耳が光る」という特徴に示されている「黄禍」というキーワードにより、テキスト内の時間設定の一九九六年と、作品の発表された一九三五年がつながっている。新旧「黄禍論」の関連性を考慮すると、「猿ヶ島」は、明治期の記憶を以って、一九三〇年代の日本を表象している小説であるといえる。

六、明治と昭和の二重書き

以上のように、同時代言説を取り入れつつ考察した結果、「猿ヶ島」から「動物園」・「黄色い猿」と新旧「黄禍論」という日本の近代化と海外進出に深く関係している要素を見出すことができた。また、一八九六年と一九三五年が重ねて描かれた、即ち明治と昭和の二重書きという作品の構造を指摘したい。この重層的な構造について、考えられる理由の一つは、満州事変から日中戦争に向うという昭和初期の難境を打開するために、近代日本の原点、即ち明治を振り返つたのであろう。

また、二匹の日本猿の遁走という結末は、何を示しているのか。日本（人）の表象とされる「猿」は、もちろん大宰治自身をも反映している。前述のように、「ロンドン博物館附属動物園」は、ロンドンと日本とを同時に指し示す複合語である。この場所設定を「ロンドン」と想定すると、日本猿の遁走は、西洋秩序の世界を拒否する日本を表しているといえよう。一方、それを「日本」と考えると、日本猿の逃走は、日本社会の秩序

を逸脱する太宰治の自画像であるとも読める。つまり、二匹の猿は、「動物園」にたとえられた、管理されて秩序ある世界から逃げ出す日本と太宰をそれぞれ表象していると思われる。

本文の引用は、すべて『太宰治全集』(一巻、筑摩書房、一九八九年)による。

図版出典一覧

図一「日本人表象①」：清水勲・ピゴーが見た日本人〔講談社学術文庫一四

九九、講談社、二〇〇四年〕、四七頁。

図二「日本人表象②」：「世界之諷刺画」【新公論】(二〇巻八号、一九〇五年

八月)。

図三「黄禍の図」：飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」

の逆説——】(彩流社、二〇〇四年)、四六頁。

注

- (1) 「猿ヶ島」は、太宰の第一小説集「晩年」(砂子屋書房、一九三六年)に収録されたとき、エピグラフ「ハハン。いや、失礼。私は自身の猿を笑ったのです。(スタヴロギン)」が削除されたのである。
- (2) 武田麟太郎「文芸時評(六) 新人の共通点」報知新聞(一九三五年八月二六日)。引用は、文芸家協会編「文芸年鑑 昭和二年版」(第一書房、一九三五年)の復刻版(文泉堂、一九七九年)による。七八頁。
- (3) 鳥丸求女「『文学界』「あらくれ」【九月の諸雑誌】」『読売新聞』(一九三五年九月一日)。
- (4) 下中邦彦編『大百科事典』(一〇巻、平凡社、一九八五年)、六九二頁。
- (5) 石渡美江ほか編『博物館学事典』(東京堂出版、一九九六年)、一八八頁。

(6) The Zoological Gardens in Regent's Park: also extended to similar collections of animals elsewhere' THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY (Oxford University Press, 1989), p.821.

(7) 'an establishment which maintains a collection of wild animals, typically in a park or gardens, for study, conservation, or display to the public.' The New Oxford Dictionary of English (Oxford University Press, 1998), p.2150.

(8) 湯本素一「図説明治事物起源事典」(柏書房、一九九七年)、二四二頁。

(9) 竹内道欧使節団は、ロンドン動物園・ロッテルダム動物園・アムステルダム動物園・ベルリン動物園とパリのジャルダン・ダクリマタシオンを見学した。なお、福沢はその五つの動物園以外にも、ジャルダン・デ・プラントを訪ねている。

(10) 富田正文編『福沢論吉選集』(一巻、岩波書店、一九八九年)、二二六―二七頁。

(11) 市川渡「尾蠅欧行漫録」(一八六二年)。引用は、日本史籍協会編『遣外使節日記纂輯』(二巻、一九二九年)の復刻版(東京大学出版会、一九七一年)による。三六五頁。

(12) 成瀬淡州「ロンドン動物館縦覧記」【少国民】(八巻一五号、一八九六年八月)。

(13) 川村多実二「動物園の職能と様式」【文芸春秋】(一四巻三号、一九三六年三月)には、「動物園は外国の Zoological garden (略して Zoo) に当るものであるから、正しい訳語は動物学園でなくてはならないが、既に言ひ馴れて居るから、やはり動物園として置く(二六頁)」という説明がある。

(14) ハリエット・リトヴァ「階級としての動物」三好みゆき訳(国文社、二〇〇一年)、二九七頁。

(15) G・ウェヴァー「ロンドン動物園一五〇年」羽田節子訳(築地書館、一九七九年)、一七頁。

(16) 『日本百科大辞典』(七巻、日本百科大辞典完成会、一九一六年)。引

- 用は復刻版(三巻、名著普及会、一九八八年)による。八九三頁。
- (17) 小泉丹「動物園」(岩波講座生物学、岩波書店、一九三四年)。
- (18) 東京都編「上野動物園百年史」(東京都、一九八二年、二一三頁)。
- (19) 佐々木時雄「続動物園の歴史」(西田書店、一九七七年、一五八頁)。
- (20) 上野動物園の所屬と名称の変遷は、中川志郎「動物園学」とはじめ(玉川大学出版部、一九七五年)によると、以下の通りである。五六―七頁。

一八八二年三月二〇日	大日本帝国農商務省博物館附屬動物園
一八八八年三月二四日	宮内省博物館附屬動物園(なお、博物館は、一九〇〇年三月二四日より東京帝室博物館と改称)。
一九〇七年一〇月三日	宮内省東京帝室博物館附屬上野動物園
一九二四年二月一日	東京市保健局公園課所屬「上野恩賜公園動物園」
一九四三年	東京都計画局公園緑地課所屬「上野恩賜公園動物園」
一九四七年六月一七日	東京都建設局公園観光課(のちの公園緑地部)「恩賜上野動物園」

- (21) 同注(18)、四四八頁。
- (22) 下中邦彦編「大百科事典」(二三巻、平凡社、一九八五年)、九二八頁。
- (23) 吉田司雄「少年よ、「猿」から学べ——教育装置としての「少年世界」——」金子明雄ほか「ディスタールの帝国」(新曜社、二〇〇〇年)、二〇〇頁。
- (24) 「日本大百科全書」(二二巻、小学館、一九八六年)、一七〇頁。
- (25) 「日本国語大辞典」(二版、一一巻、小学館、二〇〇一年)によると、

「光る」は以下の意味を持つ。①光を放つ。光がさす。光を発する場合にも、また、光を反射する場合にもいう。②色彩などが輝く。光り輝くように美しくみえる。美しく映える。③光沢を有する。つやつやしている。④容貌、容姿などが、まばゆいほどに美しくみえる。⑤装飾を施した物などがきらびやかに輝く。⑥勢い、誉れ、徳などが盛んに現われる。威光を示す。栄光がある。⑦金をたくさん持っている。金の威光がある。⑧色男然とする。通人ぶる。また、見せびらかすさまである。⑨人物、才能、技量、仕事などが、他よりも一段とすぐれる。ひいである。⑩目に、ある様子や表情が強く現われる。⑪「目が光る」から転じて「見張りがきびしい、人が見ている意の、盗人仲間の隠語。⑫家人が寝ていない意の、盗人仲間の隠語。(二六四―五頁)。

- (26) 同注(25)、一六一頁。
- (27) 清水勲「ビゴーが見た日本人」(講談社学術文庫一四九九、講談社、二〇〇四年)、四二頁。
- (28) 同注(27)、四七頁。
- (29) 井上作樂「世界の諷刺画に現はれたる日本人」【新公論】(二三巻七号、一九〇八年七月)、一三頁。
- (30) 島田三郎「三条の弁惑」【太陽】(二〇巻一〇号、一九〇四年七月)、四九頁。
- (31) 「亜細亜民族の覚悟を促がす」【中央公論】(二九巻九号、一九一四年八月)、六頁。
- (32) 桑原臨蔵「黄禍論」【新日本】(三巻一〇号、一九一三年一〇月)。引用は「桑原臨蔵全集」(一卷、岩波書店、一九六八年)による。二二―三頁。
- (33) 「新公論」(二九巻七号、一九〇四年八月)。
- (34) 「太陽」(二四巻三号、一九〇八年二月)。
- (35) 「黄禍説は杞憂なり」【読売新聞】(一九〇四年九月三〇日)。
- (36) 森鷗外「黄禍論梗概」(春陽堂、一九〇四年)。引用は「森鷗外全集」

- (二五卷、岩波書店、一九七三年)による。五三七頁。
- (37) 剣南「日本主義の復活」『読売新聞』(一九〇四年五月二十五日)。
- (38) 同注(15)、表紙裏。
- (39) 同注(17)、三三頁。
- (40) 山内祥史「解説」、『太宰治全集』(二卷、筑摩書房、一九八九年)、四六七～八頁。
- (41) 同注(18)、一一一頁。
- (42) ほかには「お猿さんが広い天地に 動物園に猿のお山」『東京朝日新聞』夕刊(一九三三年一〇月一六日)。「お猿さんの天国はどうなる? 上野動物園に出来た猿山に早くも起る猿君の不平不満」『読売新聞』(一九三二年一月六日)。「持余す動物園の猿ヶ島 いがみ合ひ凍死、負傷者続出」『東京朝日新聞』夕刊(一九三三年一月二四日)。「エテ公喜ぶ 猿ヶ島に開放さる」『東京朝日新聞』夕刊(一九三六年一〇月二二日)といった記事がある。
- (43) 日清・日露戦争頃の「黄禍論」と区別するために、本論文では、清沢淵の分類(注(48))を参照にしたがい、一九三〇年代の「黄禍」言説を「新黄禍論」と称する。
- (44) 石井修「世界恐慌と日本の「経済外交」」(勤草書房、一九九五年)、一一四～五頁。
- (45) 「日本の経済進出は世界市場の脅威 欧洲諸国の協力を強調したムソリーニ伊首相のステートメント」『神戸新聞』(一九三四年一月二〇日)。
- (46) 「仏国も露骨な黄禍論」『東阿紛争に日本策謀』伊国の懐柔宣伝に乗る『読売新聞』夕刊(一九三五年七月二八日)。
- (47) 米田実「欧米の排日」『中央公論』(四九卷七号、一九三四年七月)、二九九頁。
- (48) 清沢淵「世界再分割時代」(千倉書房、一九三五年)、一一三頁。

(オウ エイブン 筑波大学大学院博士課程)

人文社会科学研究所 総合文学)